



## 「白衣の天使」という感情労働者

東北公益文科大学 准教授 渡辺 暁雄

地元酒田市の看護専門学校で、数年前から社会学を担当しており、看護学生と接する機会に恵まれている。学生たちの学業意欲は、理想とする職業人像が反映されてか非常に高く、社会学など看護の専門科目でないにも関わらず、その成績は上位大学に引けをとらない。

一方山形県内の病院では、2011年、看護師新規採用者が募集定員の2/3にとどまっており、離職者も541人に上る。中でも就職1年未満での離職者はその1割を占める。また県内の養成機関を卒業してもその4割が他県に流失している現状も、看護師不足に深刻な影響を投げかけている。

病院関係者からも「新卒者の看護師の健康面や精神面の問題による離職が増えてきている」（『毎日新聞』2012年9月25日）という声が聞かれ、新卒者の離職によって「中堅層への負担が増して退職するケースもあり、対策が必要」（『山形新聞』2012年9月16日）とのことだ。

こうした近年の看護師不足について、一風変わった題材を素に考えてみよう。「ドラえもん」で有名な藤子・F・不二雄の作品から。

時は惑星間航行が可能となった未来。宇宙船という閉鎖空間で長期にわたる生活を強いられる中、乗組員の関係性は悪化。些細なことで争いが起きるようになる。相互の不信感が最高潮に達した時、メンバーから嫌われていた一人の乗組員が「発狂」。ロケットの原子炉を占拠。この非常事態に、争い合っていたメンバー全員が団結し…。

実はこの嫌われ者、自分に敵意という感情を集中させることにより他のメンバーの団結力を強化する「にくまれ屋」という仕事。それにより高額報酬を得る（「イヤなイヤなイヤな奴」。『藤子・F・不二雄大全集 SF・異色短編1』収集）。

こうした、賃金や報酬を得るために、業務として自己の感情の管理を徹底して行なわねばならな

い労働を、アメリカの社会学者ホックシールドは「感情労働」と呼んだ。彼女は、感情労働者の典型としてデルタ航空の客室乗務員のサービス訓練を観察。乗務員は、乗客に感謝の念や、安心という感情を喚起するため「人格にとって深くかつ必須のものとして私たちが重んじている自己の源泉をもしばしば使いこむ」（石川准・室伏亜希訳『管理される心』）。ある者は職務に過剰同調するが故に「燃え尽き」、またある者は、役割を演じる「嘘つき」な自分に嫌悪感を抱く。

感情管理を徹底することによるメンタルな側面の危機は常に伴うものの、「にくまれ屋」のように、業務の対価として正当な報酬が保証されていれば、まだ救いがある。しかし、例えば看護師などの、過酷な感情労働の現場で働くケア労働者はどうだろう。看護師は、「白衣の天使」や「聖女」といったイメージから（そして本質的には「女性である」ことから）、自発的な行為として認識されがちであり、ケア労働者本人もそうした幻影に縛られている。

感情労働がそうした職種にとって正当な業務である以上、対価としての社会的評価と賃金で裏付けられるべきであろう。看護師不足の解消や離職率低下を計る上でも、さらには理想を胸に抱き、日々努力している「看護師の卵」として魅力的な職場であるためにも。

### 渡辺 暁雄（わたなべ・あけお）

東京都出身。明治学院大学社会学部卒業。同大学院博士課程満期退学。専門は社会学、大衆文化論、生活文化論。

著書に『社会調査論』（学文社、共著）、『環太平洋先住民族の挑戦』（明石書店、共著）、『大学地域論』（論創社、共著）、『ことばの杜へ』（山形新聞社編、共著）など。酒田市食育・地産地消推進委員会委員長